北山修先生に感謝

白鷗大学教育学部准教授
伊　崎　純　子

最終講義の紹介

平成29年2月4日土曜日、本学東キャンパスの白鷗ホールにて前例のない最終講義：北山修副学長退職記念特別公開講座「LAST レクチャー＆コンサート」が行われた。約550名（一般公募400名、学生70名、学内外の関係者80名）の来場者によって客席はほぼ満席だった。実は、新聞やラジオが最終講義の話題を取り上げると瞬く間に2000名を超える聴講の応募があり、会場の制約から一般公募分は抽選せざるを得なかった。つまり、幸運の持ち主だけが最終講義を聴講することができたと言える。北山先生の人気の高さと県内にとどまらず日本各地から人が集まる凄さと熱気に圧倒される出来事だった。公人として研究者の北山修とミュージシャンのきたやまおさむ、そして私人として生活者・一般人の間を生きることを長年続けてきたパワーは並大抵ではない。

以下、敬称を略して最終講義の様子を紹介することをご容赦いただく。

プログラムは、概ね予定通りに進行した（次頁図１参照）。仁平義明による北山修の紹介を兼ねたあいさつを受けて、「〈名前のないアート〉について」北山が基調講演を行った。近年注目されているアウト サイダー・アートは、美術教育を専門的に受けていない人々の作品群を指す。作品の多様さ、定義の難しさから、北山は「名づけられないアート」（きたやま，2016）と呼び、今回は〈名前のないアート〉と呼んでいる。講義の中で北山は症例を紹介しながら、ネガティブ・ケイパビリティ（Negative Capability）：「消極的能力」「消極的受容力」「否定的能力」の重要性を指摘した。そのうえで、〈名前のないアート〉の価値は、わけのわからないものに対する曖昧

北山 修 副学長 退職記念特別公開講座

LASTレクチャー&コンサート

基調講演 ＜名前のないアート＞について

14：30～15：15　北山 修

250名様 無料ご招待

北山 修（きたやま・おさむ）

1946年淡路島生まれ。1972年、京都府立医科大学卒業。ロンドン大学精神医学研究所にて２年研修後、北山医院院長を経て、2010年春まで九州大学大学院人間環境学研究院・医学研究院教授。現在は、白鷗大学副学長兼特任教授、九州大学名誉教授。専門は精神分析学。

専門書としては『劇的な精神分析入門』（みすず書房2007）、『最後の授業』（みすず書房2010）、『意味としての心』（みすず書房2014）など多数。きたやまおさむ著で分析的な自伝『コブのない駱駝』（岩波書店2016）が発表されたばかりである。

対　談 15：15～15：45

北山　修

粕谷圭司 国画会会員、日本美術家連盟会員、白鷗大学教授

伊崎純子 白鷗大学准教授

司会：伊東孝郎 白鷗大学教授

白鷗大学副学長の北山修が2017年３月をもって定年退職いたします。つきましては、白鷗大学における「最後の授業」を一般公開することとなりました。

基調講演と対談に冠した＜名前のないアート＞とは、「アウトサイダー・アート」または「アール・ブリュット（生の芸術）」と呼ばれるプリミティブな作品群を指します。これらの作品群を表現するために、心の問題を言葉で取り扱う“精神分析家”であり、きたやまおさむという“作詞家”が見出した的確な言葉は新たな視点を提供することでしょう。

250名様を無料ご招待いたしますので、お誘いあわせのうえご応募ください。

ミニコンサート 15：50～16：30

北山 修作品集＜あの素晴しい愛をもう一度＞

MC：山本コウタロー 白鷗大学教授

きたやまおさむ　青木まり子　玻璃音（ハリオン）モード

日時 2017年2月4日(土)

14：30～16：30（開場 14：00）

会場 白鷗大学東キャンパス　白鷗ホール

栃木県小山市駅東通り2-2-2（JR小山駅東口より徒歩１分）

東キャンパスへお越しの際は、公共交通機関をご利用ください。

応募方法

＜インターネット＞白鷗大学Webサイト申し込みフォームより必要事項を入力してご応募ください。

＜ハガキ＞〒323-8585　白鷗大学フォーラム係　宛

郵便番号、住所、氏名、ふりがな、年齢、性別、職業、電話番号、同伴者の有無（１名様まで）を官製ハガキに明記してください。

お申し込み多数の場合は抽選となります。当選者の発表は招待券の発送をもって代えさせていただきます。

招待券の発送は開催日の14日前を予定しています。応募に関する個人情報は招待券の発送以外には利用いたしません。

応募締切 １月16日(月)必着

お問い合わせ先 白鷗大学 地域連携サポートセンター　TEL 0285-22-9790　平日9：00～17：00

図１　公開講座の案内

耐性（Ambiguity Tolerance）を私たちに自身に付与する点ではないかと述べる。最後は、第三者に言葉で説明のしづらいこの講演自体も含めて、「あなたは感動を意味も分からず（無意味なまま）置いておけるか」と問い、〈名前のないアート〉の余韻を残して講演を締めくくる。

司会の伊東孝郎が「作品を作り続ける人と、作れなく（あるいは作らなく）なって治療者の元を去っていく人の違いは何か？」と質問したところ、「周囲が期待すると作れなくなる。多くの人は自分のために、自分が生きるために作品を創っている。私のため、特定のあなたのために作るクリエーションであり、第三者のための作品ではない。私のために作る場合はすぐ止めることができる。私自身も自分のために作詞をしており、多くの作詞は公表されずに消えていく。」と応答をしたのが印象的だった。

その後、北山と粕谷圭司と筆者が対談を行い、代表学生から今年度退職する北山、粕谷、仁平に対し花束を贈呈するセレモニーがあった。

休憩を挟むと場はコンサート会場に変貌し、青木まり子と波璃音モードによるきたやまおさむ作品集「あの素晴らしい愛をもう一度」のミニコンサートが行われた。MCは山本コウタローだった。さらに、サプライズゲストとして杉田二郎も加わり、コンサートは一段と華やかになった。体調が万全ではなく当日は歌わないと言っていた北山も「きたやまおさむ」として思わず歌ってしまうほど大変な盛り上がりを見せた。

遠くは九州や北海道から最終講義のために白鷗大学に参集した来場者はどのような感想を抱いたのだろうか。東京新聞（2017.2.8.夕刊）に対してコメントした女性は「講義は難しかったけれど、包容力、異なるものを受け入れる大切さに共感した。コンサートも素晴らしかった」と述べている。

短時間の対談を担当した筆者はもう少し基調講演を振り返り、対談の中身を味わいたかったという思いが残った。そこで本稿で再考を試みる。

〈名前のないアート〉

ロンドン大学やモーズレイ病院で卒後研修をしていたころから北山はこ

れらの作品に関心を寄せていたという。そもそも、世間一般で使用されているアウトサイダー・アートあるいはアール・ブリュットという言葉で北山は良しとせず、ネームレス・アートという名称を発想し、今回〈名前のないアート〉と呼んだのはなぜだろうか。

北山は、作詞家として上滑りではない身体感覚にすり合わせるような繊細な言語感覚を有し、母語としての日本語での臨床を語ることを常に強調してきた。筆者も「日本語臨床研究会」を通じて北山から多くを学んだ。それゆえに、北山がアウトサイダー・アートやアールブリュット、ネームレス・アートというようにカタカナで表記するのはなじまない。しかしながら〈名前のないアート〉と聞いて直感的に名のない野花がないように、アートにも名前はあるのではないだろうかと思われた。まだこれという呼び名ではないように思われる。北山は腑に落ちるような和語を探っている過程にあり、「言葉にしないまま置く」といいながら、言葉を様々にあてはめてみて、ぴったりする言葉を思案しているのではないだろうか。

筆者なら、どのような言葉をあてはめようか、と考えたとき「凍った溶岩アート」という言葉を思いついた。生々しく終わりのない感じや洗練されていないゴツゴツした頑なな印象が語の印象と近い。美しさや生命力を感じるときもあるが、自然発生・偶然の産物であり、環境により形を変え、社会との接点を見出しにくい。

ひとまず〈名前のないアート〉と仮置きされたことで、筆者を含め会場にいた者は、無名の作家の手によるユニークな作品群に傾注することとなる。独創的で、真似ができないが、真似したいかといわれると首をかしげてしまう。対価としてお金を支払う価値をどこに見出すのか戸惑ってしまう作品群である。例えば、筆者は、企業が使用するパッケージにこれらのアートを使用する例があることを知っている。しかし、それらは社会貢献の一環の出来事という認識で、個々の作品や作者に対して特に気に留めず今まで素通りしていた。

この「そこにあった石ころの価値を発見するような感覚」は、北山から

学ぶときに頻繁に伴う。例えば、昔話『つるの恩返し』、そして木下順二の戯曲『夕鶴 』の物語も知っていた。しかし、なぜつるや夕鶴のつうが美しく描かれるのかを疑問に思ったことはない。北山の夕鶴論を読むと、よそ者（アウトサイダー）で、化身（自分とは異なるものとして異世界に放り去りたい存在・エスと同意か）が、献身的に自己犠牲を尽くし命かけて繊細な反物を産み出す「ツル（獣、性愛、エス）」の無様なおかしさを「美しく加工する」心の動きに留意するようになる。そして「美しさ」や「繊細さ」の背後に隠された「おかしさ」、「強迫」の背後に蠢く「混乱」や欠如した「余裕（余白・アソビ）」「図太さ」の重要性に思い至る。

化け物であるツルと人間である与ひょうは多面的な存在である。ツルはある時は外からやってくる異世界のものとして「みたことのない患者像」の表象となる。別の時は献身的過ぎて去らねば命を危険にさらし、患者を見捨てる「失敗する治療者」の表象となる。対応して、与ひょうもまた傷ついた弱者を助けようとする「献身的な治療者」や、患者の気持ちとすれ違うために患者に置いて行かれる「失敗する治療者」、結果として献身的なツルにも「見捨てられた患者」を表象することもある。筆者はこのようにして、北山が取り出した身近な例から簡単には立ち去らずに生き残る（survive）治療者が物語の展開をうながし悲劇の反復を回避するという治療機序を学んだ。

今回、ツルは「アーティストやクリエイター」を表象し、与ひょうは何も生み出さず、ツルに作品をねだる「凡人」を表象しているように思われた。芸術家である粕谷や作詞家である北山と異なり筆者は凡人であるため、〈名前のないアート〉の創作者に対する異世界感覚や自分の苦手意識を自覚している。そのような中、〈名前のないアート〉に接する時間が増えたことで、「見慣れた」感覚が筆者の中に生じ、受け入れやすくなっている自分に気づいた。置いておけるようになった、のかもしれない。そして、これが北山のいう消極的受容力なのだということも理解できた。慣れること、なじむことは、違和感に気づくよりもゆっくりと知覚される。アウトサイド

だったものがいつのまにかじわじわと浸透し、インサイドになっていることがこのアートの魅力なのだろう。北山が「心の胃袋」とたとえた、心の消化能力は幾分か容量を増しただろうか。

作者と作品の濃密な関係

筆者は〈名前のないアート〉ときくと、障碍者の絵画や陶芸といった美術作品を思い浮かべる。しかしながら実は〈名前のないアート〉の守備範囲は広く、映像や音楽、舞台表現も含まれている。特に美術作品は、時として緻密さが突き抜け、過度に繰り返され、文字通り非常識であり、奇妙さが際立つ時もあるし、気が遠くなるような時間感覚と集中力で見るものを圧倒することもある。作成時の時空間は「私」に埋没していたことを容易に想像でき、観覧すると作品を前に戸惑いを禁じ得ない。筆者は作家と作品の濃密な関係性を前にしていたたまれなくなり、素知らぬ顔をして通り過ぎたい気持ちを覚えるのである。物語が読み取りにくく、感情移入しづらい点も指摘できよう。まったく同じ小さなモチーフを繰り返す独自性に対し、適度な終止符をうつことが困難である。

今回、置いておけるようにはなったが、正直に言えば、まだ「みつめること」もできていない。言葉を紡ぐ身体は言葉にならないもの、血みどろの醜いものや小さな細胞の集合体を孕んでいる。鏡をつかって歪みなく、泡立つ感覚に耐えながら「みにくいもの」を正視することはても難しい。

作品には様々な感情が練りこまれているようだ。凡人がたやすく展開を予想できるような万人受けなど端から望んでいない。無論、人がどう思おうと構わないというなりふり構わない生き様も、ありのままの自分を受け入れない世間への挑戦と落胆と怒りを含んでいる気がする。夕鶴が産み出した反物のように、作者の血肉や涙とともに価値を伴うような、生々しい作品はどう扱えばいいのだろうか。

〈名前のないアート〉のユニークさを面白がれるのは、作者の保護者が多いという。何かができるようになる（doing）のも嬉しいのは間違いない

が、ただ元気であれば（being）よいと思えるのは、あたたかな保護者の眼差しなのだろう。眼差しの中で能動的な命の発露のようなエネルギーが先行するときに、作為のない感動をもたらす作品ができるのかもしれない。

誰のための創作か ── 私有・公共・共有 ──

彫刻家である粕谷は、社会から隔絶された状況の中で彫刻を作り上げるとき、心の中にいる自己イメージと対話しながら創作するという。そして、作詞家である北山も心の中にいる他者イメージに対して詩をつくるらしい。

長時間の没頭ののちに、完成すると我に返り人恋しくなり、展覧会で公表し社会と接点を持つそうである。一方依頼で作るときの作品は受動的で、媚があり、「工芸品」に近いという。そして自分のための作品とはまったく違う別物と感じることを粕谷は教えてくれた。もちろん工芸品は社会からの要請に応える側面から市場の原理が働きやすく、人のために生活費を稼ぐために作品をつくることを職業とする人も多い。〈名前のないアート〉にはこのような器用さはなく、あくまでも「私」のための作品である。工芸品や手芸品、製菓などが福祉事業として売られるときは市場よりも安価であることが多い。

私見だが芸術作品の多くは、作者が亡くなってはじめて高値をつけることが多かったのではなかったか。その理由として、分身である作品を芸術家が手ばなせず、市場にその存在を知られることがなかったこともあるだろう。また、生前には将来にわたり産み出される作品の全容がわからないために供給過剰を勘案し、もしくは今後もっと素晴らしい作品が出てくる可能性を見越して、安い値段しかつかなかったのかもしれない。

〈名前のないアート〉には、さらに「営利」や「市場」になじまない「福祉」や「ボランティア」の世界のものという要因も含まれているように思う。お金に目がくらんだ凡人与ひょうがツルの反物を売り、さらに生産を要請した時のツルの傷つきを想起するためかもしれない。

北山の研究や作詞は独創的だが、公共性がある。「私」の表現であっても「私たち」の身体感覚に根差した表現のために人気がある。講演で「自分の女々しさが詩をつくり男性としてうたうために、女性にも男性にも受け入れられる」と述べていた。きたやまおさむとして詩を書き、歌う。自身の経験から「私」や「自分」、「自身」が形成され、「私」のために創られた作品のどこかに無関係な「第三者」が共有できる何かがある。この理由として北山は、作詞として紡ぎだされた言葉は非言語的な作品と異なり特定の聞き手を思って創出されるためかもしれないという。

粕谷は、対談の最後に「精神的に病んだゴッホの作品と〈名前のないアート〉で紹介された作品とは違うものだと感じるが、どこにその違いがあるのか」と北山に尋ねた。北山は「〈名前のないアート〉からゴッホと並ぶような作品が出るかもしれない」としながら、現時点では議論の余地があるとした。筆者は〈名前のないアート〉が芸術作品として成立していくためには、粕谷が人恋しくなった瞬間のような社会との接点への欲求が底辺あるいは周辺に感じられるかどうかがカギを握っているのではないかと思う。子どもの落書きも広い意味で〈名前のないアート〉であり母にとっては価値ある宝物となりうるが、第三者が価値あるものとして興味をもつことは非常に少ない。どんなにユニークな作品であり、聖なる一回性を保持していても、社会への希求性がそこに見当たらないからではないだろうか。

凡人がクリエーターに接する時の留意点

粕谷は自分のために作品を作るときは時間も忘れ、音も遮断したような意識の集中があり、お茶に誘う家人の声も面倒に思えるという。それゆえに、緻密な作業に入り込んでしまう障碍者の気持ちは同じ匂いがするという。同時に、工房のある場所によって作品が変わることもあると語っていた。誰が創出したか、と同じくらい、どのような環境で創出されたかは作品にとって重要な素地となる。

発達障害をもつ子どもの療育に携わる人的環境である筆者に 、子どもた

ちはどのような態度を望んでいるのだろうか。療育は「教育」や「保育」の概念を含んでおり、ただ居場所を提供するだけではなく、具体的な発達支援を多少期待されているところがある。子どもがお絵描きに熱中しているときに、「そろそろ終わりの時間だよ」と現実を伝える役割もある。その現実的な要請を伝える第三者に子どもと同じクリエイター側の北山と粕谷が期待することを、療育現場の自分の立ち位置の参考にしたいと考えた。そこで筆者は、創作中に、現実としてそばにいる第三者はどうすればよいのかと二人に尋ねた。

粕谷の回答は「わからない」というものだった。作品と対峙している芸術家の時空間に他者が入り込む余地などない。もっともなことである。

北山の回答は少し違った。臨床家としての立場を慮って発言したのかもしれない。「第三者はそこに居続けることで、創作者の第二者（特別なあなた）になれることがあるかもしれない」と。そして、凡人がクリエイターに接する時の留意点として「その場に居続けること」「作品を大切にする環境を用意すること」「時間をかけて慣れること」をあげた。乳幼児の持つ新奇な場所や人への人見知り軽減される過程 、即ち繰り返し出会うことによって見慣れてくること、再訪を期待するようになるという愛着の概念と関連させながら筆者はその回答を受け止めた。

あきらめるのでもなく、開き直るのでもなく、あるがままを受け入れているのは、臨床家ではなく患者や子どもたち自身だ。じっくりとつきあうこと、このことが「去らないツル」として生き残る臨床家像を提供する。そして凡人である筆者が異世界だと分類して距離をおいていたものと人に慣れ、関係性が変容する。善意の顔をして、与ひょうがツルに売れる反物をつくらせたように、社会に接点をもつ子どもたちに「変化」を期待してしまう筆者の態度はおろかである。子どもたちは自分ではなく社会に顔を向けている筆者を見捨て、どこか優秀な臨床家との出会いを求めて去ってしまうだろう。子どもが自らを創作する空間と時間を守る大切さを頭では理解しているつもりでも、凡人ゆえに一向に自分のものになっていないこ

とを再認識した。自分の傲慢さを見つめるゆとりと、繰り返し自らの対応を省みる時間が筆者には必要だということを改めて学んだ。

結びに代えて

潔く去ること、散ることの美しさを日本人は愛でた。すでに去ることを決意した人は心を残すと未練たらしいと言われ、多くは次の旅先を夢想し、心はここにない。置きざりにされた人は辛く哀しい気持ちを噛みしめるが、後追いは見苦しく「行かせてあげなさい」と諭される。筆者が学生の頃、北山先生は酒席でよく冗談交じりに「ほっといてくれ」と言い、先輩も心得たもので「放っといてあげるわよ」と笑って返していたことが思い出される。筆者は勝手気ままに、つかず離れずの距離感を保ち、遠くにいても近くにいても恩師の気配に寄りかかっていた。

北山の将来の夢は動物園の園長だったそうだ。高校生の筆者の夢は秘書か子どものカウンセラーだった(どちらも影の世話役である)。北山のおかげで当時の夢は二つともほぼ叶えることができ、さらには過分にも大学教員（人前で光が当たる職）に就くことに恵まれた。北山先生、人生の道標となる学びの反復をありがとうございました。

参考資料

きたやまおさむ（2016）．コブのない駱駝 ── きたやまおさむ「心」の軌跡 ──，岩波書店

佐藤太郎（2017）．あの素晴らしい講義をもう一度　北山修副学長、定年退職，朝日新聞デジタル（2017年1月21日）
http://www.asahi.com/articles/ASK1B42VNK1BUUHB008.html

大学通信（2017）．［白鷗大学］白鷗大学が２月４日に「北山修副学長　退職記念特別公開講座」を開催　── 作詞家きたやまおさむのミニコンサートも開催，（2017年1月6日）
times.sanpou-s.net/detail/pid-6433/

東京新聞（2017）．一番必要なのは包容力　白鷗大「フォークル」で北山修さん最終講義（2017年2月8日 夕刊）
http://topics.smt.docomo.ne.jp/article/tokyo/region/tokyo-CK2017020702000177?fm=latestnews

ボーダレス・アートミュージアム（2015）．NO-MA　ラジオ番組「Glow 生きることが光になる」きたやまおさむ氏特別講演「生々しい何かと強迫～なぜ、作品に巻き込まれるのか～」
https://www.no-ma.jp/?p=10872